第7回研究所研究集会　全体会報告

通知表をこのようにつくった

霜野好克

一、はじめに

四十五年前（小学校三年当時）の私の通知表は、B5二つ折り、見開きページにはまず行動の記録がある。五段階評定（非常によい・よい・普通・あまりよくない・よくない）で、①人と協力する、②仕事を熱心にする、③計画工夫する、④正しく批判する、⑤態度が明るい、⑥礼儀が正しい、⑦衛生に注意する、⑧物を大事にする、の八項目であった。同ページには、身体の記録と全国平均学童発育状況の記録がある。

次ページは、学習の記録である。国語（聞く・話す・読む・書く・作る）、社会（理解・態度・技能）、算数（理解・態度・技能）、理科（理解・態度・技能）、音楽（鑑賞・表現・理解）、図工（鑑賞・表現・理解）、家庭（理解・態度・技能）、体育（理解・態度・技能・習慣）、自由研究（着想・発展）となっており、いずれも五段階評定（非常によい・よい・普通・あまりよくない・よくない）である。

当時のものをすべて良とはしないが、現在の通知表と比べ単純明快で大変興味深い。

二、当校における通知表づくり

九三年度同じ町内I小学校（八学級・一八〇余名）へ赴任した。通知表の形式は、前任校とほぼ同じ。ただし、全学年とも各教科の評定なし。初めの項目に「関心・意欲・態度」を入れるようにしてあった。基本的には、前年度の通知表を受け継ぎ、問題点をその都度話し合い、補正していくことにした。

(1)一学期学習の記録の補正

①一学期に学習した内容を到達度評価として行う。

②評価の観点は、各教科の単元や題材によって、最大六項目くらいとする。

③到達度について学年間の系統性があるか検討する。

④「関心・意欲・態度」の表現は、進んで～できる。～しようとする。意欲的に～できる。などとする。

なお、校長より通知表について、次のような指導があった。

・評価は、激励するために行うものであるとの考えを基本とする。
・情報の一方通行でなく、教師と保護者の意見交換ができるようなものとする。
・低・中・高学年等発達段階に即した内容・表記とする。
・学習のしかたが分かる（努力目標がつかめる）評価とする。
・新しい学力観に立った評価の重視。
・児童の可能性を伸ばす評価の重視。

校長の指導については、深い論議はしなかった。

(2)通知表についてのアンケート

今後の課題を明らかにするため学級担任へのアンケートを実施した。

①到達目標設定の問題点

・算数や理科は、目標や内容がはっきりしているので設定しやすい。
・国語は、話す・聞く・理解・表現・言語事項など観点が多く、細かいのでどの学期にどれを重点に置くか難しく、抽象的な表現にならざるを得ない。一番難しい教科である。
・全教科を通じて、学習理解の個人差が大きく、到達目標をどのあたりに置くか難しい。

②関心・意欲・態度の設定や評価について

・体育、図工は、子どもの態度・表情などが見やすく設定しやすい。
・国語、算数などは、大変難しい。必ずしも行動に現れたりしない。黙っていても関心がないとはいえない場合も多く、多く発言するからといって必ずしも意欲があるとはいえないこともある。

③関心・意欲・態度の評価をどのように行っているか

・その教科への取り組みの姿勢、顔の表情・学習中の発言。
・ワークテストによる評価や個人カードによる。
・学習用具の準備の様子、見学学習や調べ学習の様子、宿題や課題への取り組みの様子による。

(3)二学期学習の記録の補正

「関心・意欲・態度」については、次のような点に留意し、通知表の補正を進めることにした。特に、観点の表現は、保護者や子どもにも分かりやすく具体的に表現することとした。

①単元や題材の到達目標として表現する。
②文末表現は、〜できる。〜がわかる。〜られる。などとする。
③「関心・意欲・態度」については、無理をして入れない。
④補正後、学年間の調整をとる。

三、通知表作成や評価の問題点

(1)関心・意欲・態度は、日常の観察の積み上げで評価しており、テストでは、評価しにくい。評価基準があいまいで教師の主観的な評価になりやすい。

(2)行動面の評価は、どの程度を良とす

るのか難しい。

四、今後の課題

(1)子どもを評価するということ

「子どもをどう評価するか」は、「子どもをどう見るか」「子どもをどうとらえるか」と深いかかわりをもつ。

当校の通知表の見方でも、「日々成長する子どもの姿を一片の通知表で正確に表すことは、不可能なことです。ここに示したお子さんの姿は、ある窓から見たごく一部の姿でしかないことをご承知おきください。」と、述べている。

「ごく一部の姿」はいいが、それでは、どのような子どもを期待し、「全部の姿」としてどう評価するのか。子どもの見方やとらえ方を論議していきたい。

(2)「関心・意欲・態度」「新しい学力観」

現実の子どもの姿を見ている学級担任としては、九九が分からない子どもをどうするかで放課後の個別指導。教室でのじゃれ合いによるちょっとしたけががもとになった親同士のこじれで、家庭訪問の新卒二年目の教師。多忙の中で実際のところ「新しい学力観」どころではない。

付記　評価規準をめぐって

本年度、当校の校内研究テーマは、『書く意欲を育てる作文指導』であり、「一時間ごとのねらいと評価規準を明確にし、個に応じた手立てを考え、ステップを踏んで指導すれば、書き方が分かり書く意欲を育てることができるであろう。」の授業仮説を立て、二月に研究のまとめをした。

通知表の学習の記録・各教科の評価観点の内容ともかかわるので、評価規準をめぐる問題点を付記しておきたい。

低学年の作文の到達目標は、『事実をありのままに順序よく書ける。』と押さえ、その評価規準として、A段階を「したことを詳しく思い出して、順序よく八文以上のメモで書ける。」、B段階を「したことを順序よく思い出して、五文以上のメモで書ける。」、C段階を「さつまいもの苗植えのことを三つに分け、三〜四文のメモで書ける。」と、押さえた。

このように評価規準の設定は、規準を具体化すればするほど数量化せざるを得なくなる。表現技能は評価できても、表現内容となると多くの問題を抱えざるを得ないことが論議された。

中学年の「五感を入れて記述する。」等では、五感の全てが入っていなければ良とならないのか。私たちは、五感の全てが入っていなくても、見たことを淡々と綴っている作品に出会った時大変感動を受ける場合も多いのである。

一人一人の子どもの感じ方や見方を個性豊かに育てることが作文指導の重要なポイントであれば、『評価規準』との矛盾は、大きい。

（しものよしかつ＝
西頸城郡能生町磯部小学校）